



Newsletter

日本在宅ケア学会

2017年3月発行

No.10

一般社団法人日本在宅ケア学会
事務センター
〒162-0825
東京都新宿区神楽坂 4-1-1 オザワビル
TEL:03-5206-7431
FAX:03-5206-7757

平成 28 年度講座日より

第 21 回日本在宅ケア学会学術集会

—生涯教育委員会セミナー，学会活動推進委員会企画より—

生涯教育委員会セミナー

現場から発信する研究の ABC (その 2) ;
アクションリサーチの方法と研究例

演者 岡本 玲子 (大阪大学大学院医学系研究科)

演者 小林 恵子 (新潟大学大学院保健学研究科)

■セミナーを聴講して■

学術集会 2 日目，日本在宅ケア学会生涯教育セミナーに参加させていただきました。実践現場では看護研究に取り組む勇気がもてず，また取り組んだとしても方法が十分理解できず実践に生かせないことがあります。

今回，アクションリサーチについて，大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻・岡本玲子先生から概説，新潟大学大学院保健学研究科・小林恵子先生から研究例をお聞きました。概説では「解決を要する現実の問題のあるところで適応され，研究参加者と研究者が主体的，民主的に協同し，互いに成長しその場で成り立つ最良の解（成解）を探るものである」と聞き，現場で取り組むのに魅力的な方法であると理解しました。また研究例からは，研究者と研究参加

者との連携の困難さはあるが，さまざまなアクションのなかからお互いが成長し，研究だけに終わらず実践に生かせる研究活動であることが示され，たいへん有意義な講義でした。

私は訪問看護現場での実践後，マネジメント力や問題解決能力をつけるため，現在大学院で学んでおり，今回初めて学会に参加しました。この経験は私の訪問看護実践において，現場にある問題を解決に向け積極的に取り組む姿勢の刺激となり，また学会が在宅ケアへの知見を広げ，それを発信している場であるということ再認識し，強い魅力を感じました。

大阪市立大学大学院看護学研究科前期博士課程

丸山加寿子



小林恵子氏 (左) と岡本玲子氏

学会活動推進委員会企画
統合失調症者を地域で支える

演者 寺田 悦子 (NPO 法人多摩在宅支援センター円)
演者 遠藤 真史 (NPO 法人那須フロンティア地域生活支援センターゆずり葉)



寺田悦子氏



遠藤真史氏

■講座を聴講して■

わが国ではここ 10 年間で統合失調症の医療機関受診者の状況が変化し、患者調査では入院患者数が 2002 年は 20 万人で 2014 年は 16 万人と減少した。精神保健福祉法が改正され、精神障害者の地域生活への移行が促進されているなか、地域で統合失調症者が生活するための支援体制の整備が喫緊の課題となっている。

講座では、NPO 法人多摩在宅支援センター円の寺田悦子氏が、2005 年に訪問看護からスタートした活動が「医療と福祉をつなぐ」ことをコンセプトに、現在は包括的な地域生活支援のため多くの福祉事業も展開し、多職種と協働し支援している活動について講義された。事例からリカバリー志向を基本に、統合失調症者のストレングスに着目したその人らしい生活への

支援を学ぶことができた。

NPO 法人那須フロンティア地域生活支援センターゆずり葉の遠藤真史氏は、相談支援、就労移行支援、まちづくり事業など精神障害者の地域生活支援に関する活動の展開を“仕かけ”と称して講義された。統合失調症者を地域で支える体制づくりには、保健医療福祉領域だけでなく、まちづくり協議会や商工会など多領域と協働しながら推進していく重要性を感じた。また、協働により生まれる地域らしい発想について興味深く聞かせていただいた。

大阪市立大学大学院看護学研究科
金谷 志子

在宅ケア実践トピック

地域ぐるみで育てる新卒訪問看護師；
大阪府の場合

立石 容子 (大阪府訪問看護ステーション協会 副会長)

1. 「新卒訪問看護師を増やす育てるプロジェクト」の発足

近年、新卒看護師が訪問看護ステーションに直接入社するという新しい風潮が全国的にみられています。

大阪府においても、少数ではありますが、病

院併設型の訪問看護ステーションや大規模ステーションで新卒看護師を採用したという報告があり、また、就職フェア等でも訪問看護ステーションへの就職を検討したいという学生の声を耳にするようになってきました。このようななか、当協会では、新卒訪問看護師の育成と訪問看護志望者の発掘を、個々の訪問看護ステーションだけに依存するのではなく協会や地域の病院、教育機関が連携して行う仕組みが発案され、2014 年、大学や養成学校の教員、教員経験のある訪問看護ステーション管理者をメン

バーに「新卒訪問看護師を増やす育てるプロジェクト」を発足させました。本プロジェクトでは、新卒訪問看護師育成の先行事例を学び、独自の育成プログラムを開発、また、看護学生が早期から訪問看護に興味をもつための「訪問看護インターンシップ事業」（現在まで述べ約580人の看護学生が参加）や、訪問看護を志望する学生との交流会「訪問看護ワールド」を毎年開催しています。

2. 協力機関との連携による新卒訪問看護師の育成

2016年度、当協会の育成プログラムに沿って教育を受けたのは新卒者4人です。4～7月は、協会が実施する養成研修や地域の協力病院が行う新卒者研修に参加し、11月以降は協力病院で実習を受け、実践で技術を学びます。各訪問看護ステーションではこれらの座学や技術演習と並行しながら、先輩看護師との同行訪問を繰り返してOJTを行い、新卒者は現場の学びを情報シートや関連図に記載し、月1回集合研修として大学の先生方にご協力いただき、看護過程の展開を学びます。

3. 機関の壁を超えて悩みを共有する体制

月1回の集合研修では、個々の訪問看護ステーションに働く新卒者が一堂に集まり、協会の教育担当者が開催する「新人カフェ」で、新卒者同士が情報交換したり、勤務上の悩みを相談したりしています。また、悩みを抱えるのは新卒者だけではなく、現場の指導者や管理者も、今の指導方法でいいのか、進捗は遅れていないかなどの悩みをもちます。このため、「指導者ピアカウンセリング」として、指導者が交流するための機会も併せて開催し、教育者、指導者、協会が情報交換をしながら、新卒者の習熟度を共有し指導内容の振り返りを行っています。

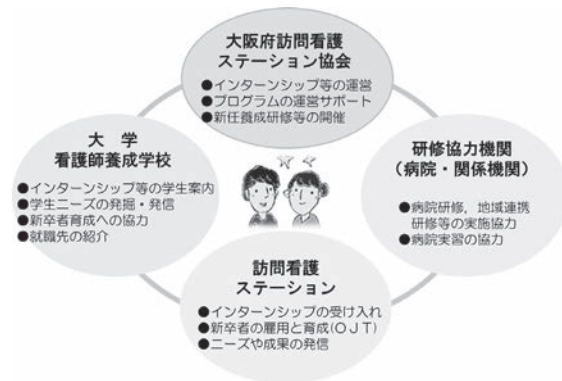


図1 大阪府における新卒訪問看護師育成体制

4. 今後の展望

大阪府の新卒訪問看護師育成はスタートしたばかりです。教育にかかわる複数の機関が、彼らの成長を協働して見守るシステムは、小規模事業所の多い大阪府の特性を生かした方式であると認識しています。また、2016年度末には、新たな取り組みとして、「訪問看護就職リファレンスセミナー」（合同就職説明会）を企画しています。訪問看護師を志す若者が、迷わず安心して訪問看護ステーションに就職できる時代（地域）を築けるよう、今後もこの活動に力を注ぎたいと考えています。

医療・福祉の総合大学が取り組む
訪問看護ステーション

棚橋 さつき（高崎健康福祉大学 教授）

学校法人として訪問看護ステーションを2015年4月に開設し、2年目に入りました。

2年目から学生実習も受け入れ、現在常勤看護師4人（うち1人は皮膚・排泄認定看護師）、非常勤看護師3人、非常勤言語聴覚士1人、非常勤事務員1人で活動しています。

また、開設と同時に高崎市から在宅医療・介護連携推進業務を訪問看護ステーションへの委託がされ、高崎市医療介護連携相談センターも同時に開設しており、大学、訪問看護ステー



今日も「群馬のからっ風」のなかを訪問します



1階は大学付属クリニック、ステーションは2階です

ションと一体となり活動を行っています。

当大学は4学部7学科で構成されています。地域包括ケアシステム構築のうで活躍が期待される、福祉・医療系学科があり、訪問看護ステーションの質向上も連携しながら行えるという恵まれた環境です。そこで、当訪問看護ステーションの活動として、実践としての訪問看護の提供、教育・研修として、定期的な研修の開催、研究事業として設置主体である大学に所属する教員との共同研究の3本柱を中心として実践と教育の融合を目指しています。また、訪問看護師が気楽に集える「訪問看護サロン」も定期的に開催しています。

訪問看護ステーションを運営するなかで大学が運営する訪問看護ステーションはさらなる付加価値があると感じています。現在、医療情報学科と遠隔方法を利用して訪問看護ステーションの事業所と療養者宅をつなぎ、新たな訪問看護の研究の取り組みを行っています。

また、看護学部大学院があることから訪問看護ステーションで看護師として勤務し、現場で実践を積み上げながら大学院にて知識を学ぶことから、指導教員と密にかかわることができ、研究課題もより実践的な内容となっています。

これまで訪問看護師は、病院での勤務を経験したのち訪問看護師になる傾向でした。しかし、今後の高齢化社会等の現状や社会情勢から新たな訪問看護のあり方も検討されています。

現在、新卒看護師が訪問看護ステーションに

勤務して育成する方法も各地で行われています。当看護学科で看護学生を教育するなかで、学生の適正や意欲を身近で教員が感じ、数人ずつの新卒訪問看護師の育成が当大学での訪問看護ステーションにおいて可能と考えています。

2017年度には1人目の新卒看護師が入職予定です。地域一体となって育成するプログラムを計画しており、県内にある総合病院で行われている新人研修プログラムへの参加、ターミナルケアを主とする他の訪問看護ステーションでの学び、他施設への研修等2年間で育成するプログラムを設定しています。また、4学部7学科ある大学であるため、訪問看護師としての必要な基礎知識を大学で開講する講義に参加して学習することも検討しています。大学が設立した訪問看護ステーションであるからこそ可能なシステムだと感じています。

まだ、走り出したばかりの訪問看護ステーションですが、元気なスタッフが頑張っています。どうぞ、ステーション見学にお出かけください。お待ちしております。

地域包括ケアシステムづくりを
目指す地域ケア会議

上野 憲司 (松原市医師会 副会長)

高齢者が住みよい町づくりを進める地域包括ケアシステムが提唱されて、幾年たったのら

うか。厚生労働省は、2012年にシステムを再構築する方針を掲げ、ひとつの手段として、2015年から介護保険において地域ケア会議を制度化し、なんとかケアシステムができるように進めている。松原市医師会はこの状況を受け、行政と協力して地域ケア会議システムをつくることになった。

筆者は、2014年までに、地域包括支援センター運営協議会会長を8年務めてきたことと、同年数にわたり、地域医療介護連携推進委員会（医療介護連携を進めるために月1回多職種が集まり、会議を開いている）の委員長を務めてきたこともあり、責任者となって地域ケア会議システムを作り上げることになった。2014年から委員会の場を利用して研究を進め、模擬会議なども開催した。

地域ケア会議は5つの目的、個別課題の解決機能、ネットワーク構築機能、地域課題発見機能、地域づくり・資源開発機能、政策形成機能を含むので、一会議体ですまないことは明白である。そこで、以下の3層レベルにわけた。①最終政策提言する地域ケア推進会議。②課題を集約し、整理、政策提言の基礎づくりを目的に運営協議会メンバーで行う中間的会議（ここが重要）。ここには個別のケア会議や従来からある医療介護関係の会議から、単独では解決できないような課題を挙げてもらった。③個別のケア会議である。

2015年から、困難事例を対象にした個別の地域ケア会議を月1回開催し、医師会から理事2人が参加。地域包括支援センターを窓口に関係する多職種や近隣住民、民生委員を含め、従来のケアマネジメント会議では集まらないメンバーでの会議がスタートした。

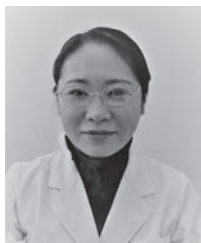
会議では、個別事例の解決と、浮かび上がってくる課題を抽出していった。多人数での会議の効果により、よいアドバイスが集まったことから、思いのほか個別の課題が解決できる状況であった。また、行政が単年度予算主義であることから、2015年度末で提言し採択されたとしても2017年からの施行になるため、2016年上半年をめぐりに地域ケア推進会議を開催した。

成果として、個別のケア会議において、ケアマネジャーが単独で解決できない課題も、多職種の参加で解決の方向性がみつけられたり、ケアマネジャーの力量不足も表面化したこともある。キーパーソンへのアプローチがより強くなったり、医師を含めたケアマネジメント会議の開催に至るなど、いままでの介護保険システムのなかで、問題視されながらも放置されてきたことに解決の道を開いたといえる。多種多様な参加者によるネットワークづくりも、包括支援センター単独より、強く形成されてきている。一例を挙げると、町の電気屋がグループに呼びかけて、見守りシステムに参加するようになったこともある。また、我田引水になるが、医師の強制的参加は効果がある。実際により意見も多くでる。背景にある病気を説明し、参加者が理解できる。医師の敷居が低くなっているのではと自賛している。

現状、最終の地域ケア推進会議において、運営協議会メンバーに追加参加となる法務局、警察、消防、住民代表の会議の目的的理解が不十分であり、発言内容や対応の仕方に課題があるようであるが、今後開催を重ねるなかで、解決されていくと考えている。また、2017年度から予算がつくように、政策提言を示し、まずは順調に進んでいる。

平成 28 年度日本在宅ケア学会論文賞受賞に寄せて —優秀論文賞受賞者，奨励論文賞受賞者より—

◆平成 28 年度日本在宅ケア学会優秀論文賞



福山 由美

佐賀大学医学部看護学科

■受賞論文 原著

白癬の治療とケアによる在宅療養者の介護予防への試み

福山 由美 (佐賀大学医学部看護学科)

内田恵美子 (日本在宅ケア教育研究所)

佐々木明子 (東京医科歯科大学大学院保健衛生学
研究科)

津田 紫緒 (東京医科歯科大学大学院保健衛生学
研究科)

田中 敦子 (東洋大学人間科学総合研究所)

高山かおる (埼玉県済生会川口総合病院)

[日本在宅ケア学会誌 Vol.19 No.1 掲載]

このたびは優秀論文賞を賜り、たいへん光栄に存じます。この場をお借りしまして、本研究にご協力いただきました在宅医の先生方や訪問看護師のみなさま方、また、ていねいなコメントをいただきました査読者の先生方に心よりお礼を申し上げます。

本研究は共著者である内田恵美子先生から「在宅高齢者は爪の肥厚や変形・皮膚周囲のトラブルがADL低下のひとつの要因になっているのではないか」というご指摘が出発点でした。そこで本研究は、多くの高齢者が罹患している白癬への治療とフットケアの有効性を介入研究にて検証することにしました。しかし、介入研究を実施するにあたり、白癬治療やフットケアの手順書作成、協力者である在宅医や訪問看護師への研修、白癬診断のための検体採取法等、乗り越えなくてはいけない課題が山積みでしたが、共著者の先生方との協働作業で円滑に研究を完遂することができまし

た。非常にダイナミックな研究に携わる機会をいただきたいへん勉強になりました。

今後も在宅現場で活躍されているみなさまとの協働を基盤にした研究活動を行っていきたいと思います。関係者のみなさまに引き続きご指導をお願い申し上げます。

◆平成 28 年度日本在宅ケア学会奨励論文賞



児玉 寛子

青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

■受賞論文 研究

家族介護者における介護終了後の生活適応プロセスの検討

児玉 寛子 (青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科)

[日本在宅ケア学会誌 Vol.19 No.1 掲載]

このたびは、日本在宅ケア学会奨励論文賞をいただき、たいへん光栄に存じます。インタビュー調査にご協力いただいた介護経験者の方々、対象者の紹介にご協力いただいた居宅介護支援事業所のみなさま、そして論文として形にするまでていねいにご指導ご助言くださった杉澤秀博先生、熊谷たまき先生、清水由美子先生に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

本論文では、家族介護者の介護終了後の生活適応に着目しましたが、要介護者の死別後、残された介護者への支援は今後ますます必要になってくると考えられます。今回の受賞を励みに、また決意も新たに、家族介護者の支援に貢献できる研究を積み重ねていきたいと思っております。ほんとうにありがとうございました。

各種ご案内

ニュースメール配信用 メールアドレス登録のお願い

本学会では、会員のみなさまへ迅速に情報提供を行うために、「ニュースメール」（不定期／年数回）を配信しております。今年度よりニュースレターはメールのみで配信となりますため、未登録の方は会員専用サイトにて登録情報入力フォームよりご登録いただくか、会員登録事項変更届のご提出をお願い申し上げます。

実践および研究助成金について

■第4回実践および研究助成選考結果■

<平成29年度助成者> ※助成額：各20万円
◇No.17-001「医療的ケアの必要な要介護高齢者と家族の在宅生活を支える看護ケアの構築」
小嶋美沙子（岩手県立大学大学院看護学研究

科）

◇No.17-002「在宅でがん患者を介護する配偶者の看取り体験の肯定的な意味づけを促す看護実践の評価尺度の検討」

加利川真理（神戸市看護大学健康生活看護学）、中谷 久恵（広島大学大学院医歯薬保健学研究科）、大塚 美樹（広島大学大学院医歯薬保健学研究科）

◇No.17-003「『ときどき入院、ほぼ在宅』を支える地域包括ケア病棟における看護実践の課題に関する全国調査」

有田 久美（福岡大学医学部看護学科）、古賀佳代子（福岡大学医学部看護学科）

■第5回実践および研究助成募集について■

募集期間：2017年10月1日～11月30日（予定）
応募資格：実践および研究代表者は当学会員（入会手続きが完了している者）であり、該年度の会費を振り込んだ者。

※詳細が決定次第、学会ホームページに掲載予定。

第22回日本在宅ケア学会学術集会のご案内

- テーマ：地域包括ケアにおけるセーフティ・マネジメント；人々と多職種の協働
- 学術集会長：工藤 禎子（北海道医療大学）
- 会期：2017年7月15日（土）、16日（日）
- 会場：北星学園大学 C館

〒004-8631 北海道札幌市厚別区大谷地西2-3-1
地下鉄東西線「大谷地駅」徒歩5分

● 主なプログラム（予定）

■学術集会長講演

「在宅におけるリスクと安心のマネジメント」

- ・15日（土）10：15～10：55【第1会場 50周年記念ホール】
講演者：工藤 禎子 座長：中島紀恵子

■特別講演

特別講演1「介護保険システムの持続とケアの質の保障；公助のあり方」

- ・15日（土）15：30～17：00【第1会場 50周年記念ホール】
講演者：白澤 政和 座長：岡田 進一

特別講演2「ご近所力を生かした孤立予防；互助、共助のあり方」

- ・16日（日）10：50～11：50【第3会場 C502教室】
講演者：谷川 良一 座長：岡田 直人

■シンポジウム

シンポジウム1「介護予防とセーフティ・マネジメント；自助，互助，共助，公助をつなぐ」
・15日（土）13：00～15：00【第1会場 50周年記念ホール】

シンポジスト：亀井 智子，田高 悦子，八木 裕子
座 長：黒田 研二，北川 公子

シンポジウム2「若年性認知症の人が安心して暮らせる社会」

・16日（日）9：40～11：40【第1会場 50周年記念ホール】

シンポジスト：平野 雅宣，武田 純子，内海久美子
座 長：小長谷陽子，諏訪さゆり

シンポジウム3「当事者・住民・専門職が創る安心な地域社会；ソーシャル・キャピタル」

・16日（日）13：00～15：00【第5会場 C500教室】

シンポジスト：栗山 文雄，小平 正治，奥田 龍人，篠原 辰二 ほか
座 長：岡田 直人

■市民公開講座；2講座

■交流集会；4講演

■ワークショップ；2本

■ランチョンセミナー；5セミナー

■委員会企画；2企画

■ポスター展示，発表，ラウンドテーブル

■平成29年度論文賞受賞者口演

■会員報告会

●事前参加申し込みが必要なプログラムについて

申し込み方法：学術集会ホームページにて

プログラム	募集人数（人）	申込期間
ワークショップ1～2	100	4/1～5/22
ラウンドテーブル1～2	各30	～5/22
ランチョンセミナー1	500	4/1～5/22
ランチョンセミナー2	150	
ランチョンセミナー3	150	
ランチョンセミナー4	150	
ランチョンセミナー5	150	

●参加費

事前参加申込締切：2017年5月22日（月）

区分	学術集会参加費		懇親会参加費	抄録集
会員	事前	6,000円	事前・当日 6,000円	2,000円 (税込) ※参加費に 含まれません
	当日	8,000円		
非会員	事前	7,000円		
	当日	9,000円		
大学院生	事前	2,000円		
	当日	3,000円		

◆お問い合わせ◆

第22回日本在宅ケア学会学術集会に関するお問い合わせ

北海道医療大学看護福祉学部 竹生礼子 E-mail：take-r@hoku-iryo-u.ac.jp

学会に関するお問い合わせ：学会事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル 株式会社ワールドプランニング内

TEL：03-5206-7431 / FAX：03-5206-7757（常設）

E-mail：jahc@zfhv.ftbb.net 問い合わせ時間：10：00～17：00（土・日・祝日は除く）